

回復期リハビリテーションにおける訓練動機づけ尺度の開発 Development of the motivation scale of training for the patients in convalescent rehabilitation system

○小池康弘 (OT)¹⁾, 井上桂子 (OT)²⁾

¹⁾社会医療法人水と和会倉敷リハビリテーション病院リハビリテーション部, ²⁾川崎医療福祉大学医療技術学部リハビリテーション学科

Key words: 動機づけ, 尺度, 回復期リハビリテーション

【はじめに】

回復期リハビリテーション(以下, 回りハ)病棟において患者の訓練への動機づけを適切に捉えることで, 患者の積極的な訓練参加を促すことが可能となり, より良い作業療法の提供につながると考える。しかし, 回りハ分野において適切に患者の動機づけを捉えることのできる尺度は見当たらない。そのため演者らは先行研究に基づいて, 訓練動機づけを自律的動機づけ, 他律的動機づけ, 非動機づけの3因子に整理し, 内容的妥当性と表面的妥当性を検討した試作版尺度を開発した。本研究の目的は試作版尺度の信頼性と妥当性を検討し, 本尺度を開発することであった。

【方法】

対象は回りハ病棟に入院する回りハ対象患者110名であった。調査用紙は, フェイスシート(年齢, 性別, 疾患名, 発症からの経過日数, 併存疾患)と訓練動機づけの試作版尺度, 達成動機尺度(以下, SAMR)を用いた。分析手順は, まず記述統計量の算出の後, 尺度の天井効果, 床効果の有無を確認し, 項目得点多列相関係数を算出した。次に, 項目特性の検討として, 項目反応理論を用いて項目の識別力と困難度を算出した。それぞれが基準を満たさない項目は削除を検討した後, 因子妥当性, 構造的妥当性の検討として探索的因子分析, 確認的因子分析を実施した。内的整合性の検討では, Cronbach α 係数を算出した。仮説検証では, 尺度の平均分散抽出を算出したのち, 収束的妥当性と弁別的妥当性の検討を行った。併存的妥当性の検討では, 試作版尺度とSAMRの相関係数を算出した。分析には主にベイジアン構造方程式モデリングを用い, 統計ソフトはMplus ver7.31を用いた。本研究は社会医療法人水と和会倉敷リハビリテーション病院の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

対象者は男性54名, 女性56名であった。疾患の内訳は脳血管疾患45名, 運動器疾患64名, 内部疾患1名であった。項目得点多列相関係数を算出した結果, 他律的動機づけの内の1項目は基準値を満たさなかった。また, 項目特性の検討の結果, 自律的動機づけの内の2項目, 他律的動機づけの内の4項目が基準値を満たさなかったため, 因子分析からは除外した。構造的妥当性の検討の結果, 自律的動機づけ5項目, 他律的動機づけ4項目, 非動機づけ4項目の3因子13項目にて良好な適合度が得られた。因子間相関は自律的動機づけと他律的動機づけ間が0.399, 自律的動機づけと非動機づけ間が0.325, 他律的動機づけと非動機づけ間が0.280であった。 α 係数は尺度全体が0.741, 自律的動機づけが0.850, 他律的動機づけが0.660, 非動機づけが0.777であった。収束的妥当性の検討では, 他律的動機づけのみ基準値を満たさなかった。弁別的妥当性ではすべての因子にて基準値を満たし, 弁別的妥当性が高いことが確認できた。併存的妥当性の検討ではSAMRと軽～中等度の相関が認められた。

【考察】

本研究にて回りハにおける患者の動機づけを評価する尺度が開発された。本研究の対象者は110名とやや少ないが, ベイジアン構造方程式モデリングを用いて分析を実施しているため, 分析の信頼性は高いと考えられる。本尺度は高い信頼性と妥当性を有しており, 適切に患者の動機づけを捉えることが可能である。また3因子13項目と簡便にかつ患者への負担を最小限に評価することが可能で, より臨床現場で導入しやすいものとなっている。今後は, 本尺度を使用して動機づけの関連要因や動機づけの低い患者への対応等を検討していきたい。